

思ふなり。

何が故に英語を以て無用の學と爲す乎。彼等卒業生は一度中學の校門を出で、活社會に列せんか、不完全に學びたる英語は、半歲ならずして腦裡に消え、片言にてもあれ、英語を操りて以て英米人に通せしむるもの幾人がある。隻句にてもあれ、己が記憶を呼び起して英文書を讀むもの幾人がある。今假に在學中に學びし英語の力を以て、巧に英語を弄して異人と話す事を得るにせよ、將又如何なる難解の英文も易々として讀破するを得るにせよ、彼等が一生涯中、眞に之を應用して異人と話し、或は英文を讀まさるべからざるの機會に遇ふの場合、幾度かある。不測にして而も殆ど無きに近きものを必用なりとし最も難澁の英語を貴重なる教育期の五個年を費して學ばんとする愚も甚しきなり。而るに此の學課を勉めずして抛擲せんか、難澁なる英語は益々難澁を重ね、遂には落第の悲運に墜入らざるべからず。故に落第を免れんと思ふ者は、嘲り付きてても之を努力勉強せざるべからず。教師は之が教授に惱み、生徒は之が熟達に焦る、而して後得る所は髣髴たる幻影のみ。

中學校を了へて家庭の人と成る者にとりては、英語は殆んど無用の學なり。然れ共、中學校より進んで高等専門の學校に入り、或は其の學を研究せんとする者にとりては、決して無用の學には非す。否、彼等にとりては實に英語は殆ど其の生命なり。故に力のあらん限り全精力を盡して勉勵せざるべからず抑々一中學校の學力の優良と劣等とは何を以て標準させらるゝか。必ず世人は、其の校の生徒の高等

専門の學校に入學する率を以て定むるならん。隨つて學校當局は、必ず多數の入學合格者を出さんと焦心するなるべし、試みに中學校の授業時間割を見よ。一週の六時間は是れ英語の占むる所なり。學校にて斯く英語を重大視すれば、生徒亦勢に制せられて英語に努力せざるべからず。實に生徒が豫習復習に時間は殆ど英語に費すなり。否、五個年の在學中は全く英語に追廻さるゝなり。隨つて國漢を始め其の他總ての學科を顧みるに餘力なきなり。今や彼等は専門の學に就かんとする少數の者の爲に完全に蹂躪せられたるなり。

斯く學校は高等専門の學を修めんとする者の爲に計るなれば、其の學に進まんとする者には幸の極ならざるべからず。然るに實は然らず。中學校を終りて止まんとする者は殆ど、將來英語の餘りに用なきを知れば、いかで難解なる無用の學を誠心誠意、自發して學ばんとするべきや。彼等の努力し以て之に勉むことは勢不得已に出でしには非すや。既にして彼等に自發の心無ければ其處に必遂巡あり。然りと雖も教師いかで彼等を拋棄して進むの情に堪へん。隨つて英語上達の進度は全生徒に涉りて遲滞すること必然なり、かくては高等専門の學に進まんとする者にとりては眞に迷惑千萬なり。普通教育を修めんとするものは、繁雜難澁の英語に煩ひ、高等専門の學に進まんとするものは、空して遲滯逡巡す。予は甚だ憂ふ。吾等も亦彼等両者のいづれの跡を追ふとしても、彼等と同じき運命に、支配せらるるに非らざるかと。

貧者は必ず富貴を願ふべし、病者は必ず健康を希ふべし、是れ人の常なり。幸は歎びて迎ふべし、不幸は忌みて之を避くべし。予も亦不幸を悲しむ者なり。熱する者の言は自ら激す。人或は其の偏狭を笑はん。然れ共予は憂を見て黙過する能はず。

予は歳を重ねること僅に十有八度、草木に譬ふれば、惠風を享けて若芽の將に萌わ出でんとして匂ふの時なり。鳥に譬ふれば、卵中にありて將に殼を破りて孵らんとするの時なり。見聞固より狭く、卑見固より用ふるに足らず。然れ共、予の想ふ所が己憚なく云はしむれば次の如く述べんとす。
先づ中學校を分ちて專攻科と、實學科とにせよ。專攻科は即ち進んで高等専門の學を修めんとする者の爲に設け、實學科は直ちに實業に入らんとする者の爲に設くるなり。

專攻科は學問の專攻を目的とするものなれば、隨つてその學科は、英語にてもあれ、數學にてもあれ其の他總ての學科を研究して、一つには高等専門學校の入學試験に備へ、一つには其の學問の蘊奥を究極せんとするの基礎を鞏固ならしめんとするなり。

實學科は、普通教育を受けて以て直に國家の一中堅となりて、社會に活動せんとする者を入れるるところなれば、中等社會の一員として恥づかしからざる程度の學にて足れり。故に第一に無用にして難きに過ぐる英語を減せよと叫ぶなり。勿論予は之を徹廢せよと言ふには非す。文明の今日、苟も中學校を卒業せし者が、全く横文字を讀む能はざるは餘りに情無し、恥ともなるべし、中學教育の趣意にも反くべし。故に英語にては會話を主とし、數學にては算、代、幾(平面)を主とす、國語には最も意を注ぐべし、地歴亦重んすべし、其の他文、醫、法、工、農、商、天文、音、美等の最も平易にして且最も一般的なるものを教授されたし。總て何に依らず、普通一般的にして中等社會の國民として知らざるべからざる事は、悉く教授せらるることを希望して止まざるなり。予は今の中學校に於ける教育の、餘りに一方に偏して實用に非らざるを患ふ。余は形式を嫌ふ者なり。

斯くして普通教育を施さば、その内に侵し難き實備りて、卒業後社會に出づるも、今日より常識に富める、眞に意義ある、而も國家の中堅、中等社會の國民として恥づることなき國民を養成すを得るには非ざる乎。





文

苑

遊江嶋金澤記（舊稿）

特別會員 伊藤正胤

武相之地不乏勝地、而其特以絕勝著者、爲江嶋金澤、戊戌之夏八月、余訪親戚內田氏於鎌倉、滯留數日、傍近舊蹟既探畢、主人說江嶋之奇勝、嘖々不措、乃向江嶋、途遭圓覺寺滯在之織田安岡二友立談少時、約以明日遊金澤而別、過長谷、出七里濱、黃沙遠連、遙見江嶋巍立于烟霧之中、如靈龜負蓬萊而浮者、左顧樹色森然、爲稻村崎、新田左中將投劔之處、沿汀而西、至腰越、入滿福寺、觀源判官與江豫州書、過龍口寺、僧日蓮免刑之場也、沙濱彎環成一海峽處、架以長棧、乃度達江嶋、上磴道、有祠宇、曰下宇、又上詣中宮上宮、結構皆偉、南下坂數十步、憩小亭、俯瞰海面、積水涵天、

不○可○端○倪○、亭○下○斷○崖○峭○拔○、水○灤○洞○、入○數○十○步○、洞○岐○循○、圍○繞○重○峰○複○嶺○淡○濃○殊○態○、雲○烟○吞○吐○、奇○變○百○出○、西○浩○蕩○無○涯○、洋○心○一○嶋○隱○夕○可○見○者○、爲○豆○之○大○嶋○、崖○而○下○、巨○巖○凸○凹○、路○窮○有○巖○洞○、入○數○十○步○、洞○岐○循○、為○兒○子○淵○、烏○帽○子○嚴○、芙蓉○峰○聳○立○天○際○、秀○色○射○人○、群○山○堰○蟠○、數○百○基○布○其○間○、孤○嶼○浮○碧○波○之○間○、形○似○帽○者○、爲○漁○舸○、側○安○石○佛○數○軀○、洞○內○泉○滴○忘○暑○、頬○僵○而○出○、時○夕○陽○、將○沒○半○天○灑○紅○、閃○閃○礫○礫○、波○濤○變○色○、曉○映○遠○接○、乃○遵○故○道○而○歸○、

翌日亭午、二友來訪、相共誦菊池之溪翁金澤遊記

而前、十數町、巖壁峻絕、中劃爲道、稱朝比奈截道、有一泉、日洗刀水、梶原景時刺平廣常洗刀處下坂、原野敞開、既而達金澤、有一禪院、曰金龍院、庭安巨石、稱飛石、傍飛石而上、石磴數十級級盡而有亭、曰九覽亭、所謂金澤八景、悉華於其下、故有是名云、予等已登、踞床以憩、前指後顧身在一幅畫圖之中、下瞰則邱陵起伏、從南方來、

西森鐵研評、叙景記事、有益于考古學、行文

亦絢爛奪目、

王父伊藤正路碑名

特別會員 伊藤正胤

王父諱正路、字伯以、通稱侯吉、曾祖諱中路長子也、世以砲術仕于高知藩、以文化十一年十月二十日、生于高知城下二十代町、爲人溫厚而有至性、自幼研鑽家法、遂究其蘊奧、嘉永三年代曾祖、爲藩之砲術師範、教授子弟、諱諱不倦、關藩翕然嚮之、藩公屢加賞賜云、文久二年以病致仕、後無幾列留守居組、更命砲術教導、三年列居從組、元治元年賜祿百石、明治二年改賜白三十石、十一年五月二十日易簷、享年六十有五、葬于城東北鋪野山先塋之次、娶島崎氏舉二女、養今村長賀弟正實爲嗣、以長女唯配之、是余考妣也、次女千枝適宗家島崎氏歿、繼娶馬詰氏舉二男、長曰正弘、現爲茨城縣立太田中學校長、是余叔父也、次曰修巳、殞矣、銘曰、

其境

夙紹祖業、家聲維揚、
教徒不倦、其德洋々、
鷹城之良、蔚山之陽、
英靈薦勃、後昆永昌、
大正壬戌一月、孫伊藤正胤謹撰、

小人の囁き

五甲 野村嘉藏

一、世人には世の中を足の下に踏みつけてゐるど
自惚てゐる者がある足の辻らない用心をする事
が肝要だ

一、世の中には自己を中心として他を顧みない自
己中心主義者がある彼等は自己の利益の爲には
命をおしまぬ位ひの人があるが左様な人は社會
公衆の爲には口をきくのも損だと云ふ様な態度
を取る者がある

彼等は自己なくしては社會なき事を知つてゐるだ
らうか つまり社會公衆の爲に盡すのは自己の
利益を便るのである事を記憶せよ

等遊民たらしめ金力を以つて勤等を購ふ奴あり

蠶に比して如何、神の子等、少しく恥を知れ!!!

一九二一、八、二〇

偉大なる夢

五乙 中山重雄

谷崎さんの「夢」といふ劇に「ネロ」だとか「
由良之助」だとか「オフェリア」だとか「揚巻」
だとかそれぐそその時代、或は人間を象徴した人
物が出て来て、色々の所作をするのを、傍の者が
さ、夢でなくつてそんなつまらないことがあ
るものか」と無難作に云ひ捨ててしまふといふの
がある相だ。

實際夢から醒めた幻滅の瞬間程「つまらない」
ものはないだらう。

併し私達の夢みるまでのプロセスや、夢中の時
程樂しいものはないだらう。この意味に於て、夢
は實に心のユートピアであると云へる。

何處やらで夢の心理を聽いた。それによるど人
間には潜在意識なるものがあつて、そこには人間

一、世には大風呂敷を擴げる痴れ者がある自己が
可能性を有する者ならばまだ恕すべし、然らざ
る口先き許りのしれ者は社會より驅逐すべし、
身の程を知れ

一、過去を考へ現在を知り未來も想ふて一度び是
と決するや全力を集中して突進すべきだ他人の
鼻息や雲の去來を窺ふ者には何事もなし得ぬ猛
火は地を焼きつくさんば止まぬ、現代青年よ
熟慮斷行の四字を記憶せよ而して之を實行せよ
一、嗚呼我々は何の爲に學問するのであらうか、是が真
正に解せられてあるならば我等は絶對的權威の
ない試験及び試験勉強に苦しむ前に不斷の努力
がなされねばならぬのである「平時を試験と思
へば試験は平時の如し」そは實に我等の胸臆に
秘めて味ふべき至言にはあらずや

一、諸君蠶は如何、元無位無爵の一昆虫也然れ共世
人お蠶様と稱し敬する事甚し、是何の故だ名實
伴なへるが故なり、是をぞ天爵と云ひつべき日
本現代に於ては親の勳功化しては子孫をして高

の思うた許されないこと、例へば過分に贅澤なこ
とか、所謂道徳上いけない事だとか、その他意
識面上すことを許されないことがおしこめら
れてゐる。それが夜こつそりと理性てふ見張番の
眼をかすめて意識面に上つて來るのが夢といふも
のださうだ。

またヒステリーなども同じことで、或醫學者の
實驗によるど、或既婚の紳士と全くセックスの感
じを超したほんとに純い交際をつゞけてゐた一
處女があつた。

所がその紳士の夫人が急病で失くなつたときには
その處女の胸にふと「妾があのひとの妻に…」と
云ふ考へが浮んだ一瞬間、彼女は非常な罪惡を犯
した如くそれを鵜舌みにして潜在意識へおしこめ
てしまつた。

それから彼女は激烈なヒステリーになつたので
ある。それでその醫學者が診察して彼女がなかなか
ものを言はふとしないのをなだめすかしていろ
くと話させる。そしてこれが病因だと思ふもの
をつかんだとき、存分にそれを言はせる。丁度氣

持の悪くなつた時にみな吐出す様にみんな言つてしまへばこの病氣は全快する。彼女もそれですつかり快くなつたさうである。

これと同じ様に人間の事もさうである。人間は終に社會的動物である。これは仕方がない。併しまだ人間に個性なるものがあつて、伸びよう伸びようとしてゐる。中には所謂道德の範圍外に飛び出さうとする病的なまた天才的な個性もあるに違ひない。所がそれは前の事から現實世界では不可能の事である。この悩み、人間苦を人間は現實の世に於て存分に苦しみつゝわづかに藝術でふ夢の一境にその理想を實現して慰められて來たのである。

故に藝術は一の大なる夢であると言へる。それは實に偉大なる夢である。

藝術乃至文學は社會性と人間性との爭鬭の記録である。人間苦の表現である藝術は人間をして人間性を自覺せしむる大なる使命を持つてゐる。

歐洲に於て最も粗野な露西亞人の藝術が、常に世界の文壇に燐然たる光を放つてゐるのは原始的

は存在を許すべきではない。さもなければ私達はいつまでもヒステリーに苦しまなければならぬだらう。唯一の慰安なる「偉大なる夢」も見ることを許されない放になるだらうから。

寄宿舍生活

五丙 河路龜之助

○純粹なる學生々活

純粹なる學生々活を味ははんとすれば、どうしても寄宿舎にそれを求めねばなるまい。身を學問中に投じて將來實社會にて思ふ存分活動する要素を作るには餘念なき勉強の他に不斷の修養をしなければならぬ。此の目的を達するには寄宿舎是最も適當したものであらう。勿論今日各學校に設置してあるものを大部分遠方からの游學者、或は身體の羸弱な者に特別の便利を與へん爲に設けられたものである。併し乍ら本來の意義から云へば、決して此の様に狭い意義のものではない。英國を初め、世界各國の中には、古くからスクールハウ

な露西亞人が赤裸々に人間性人間苦を描寫したからである。そしてそれは私達にとつて自分の捨てた兒を見る様ななつかしさを起させるからである。我が近松の作品に於ても、容られぬ人間性の懲みがまざりと描き出されてゐるではないか。

兎に角歐州中世に於けるが如く、人間性を忘れた否忘れさせられたのは人間であると云ふ事を忘れたのである。人間ぢやない、木石だと言ふ事になる。

ルソー以來の近代思潮は最も人間性を重んじ最も人間的であつた原始時代の生活に復帰せんとしたてゐるさうである。人間が三千年來積み來つた文明を抛つてまで原始時代のそれに歸らうとするのは何のためか。たゞたゞ忘れられたる人間性を恢復せんがためである。

要するに人間の思潮は社會性と人間性との争鬭であり、靈と肉との葛藤である。この二つを調和させた所謂「第三帝國」、私達の向ふべき所はそこにある。

故に人間性を没却した教育、社會、宗教、道德

するものが發達して、完全なる寄宿舎をなしてゐるものが多い。是等は中等學校及専門學校が大部分であつて、入學と同時に入舍するものである。近來我が國でも陸海軍人養成の學校や師範學校等は略是に近い寄宿舎を設置してゐる。此の様に學生には寄宿舎生活が最も適切で且つ價値あることを認し、又必要に迫られる様になつて來たのである。周知の通り一高の名聲が國內學生間に憧憬のととなつてゐるのは、勿論學術の中心たる帝都にある第一位の高等學校であり、幾多の偉人硏學を出した歴史も興つて力がある。併し就中彼の自治を以て誇りとしてゐる一事は最も大なる最も力強い一原因であると思ふ。さうであるから、寄宿舎は學校と離るべからざる密接な關係があり、學校の盛衰はその中心たる寄宿舎の如何よると言つても過言ではあるまい。故に寄宿舎は學校の寄宿舎學生の寄宿舎である。單に一部の學生に限られ、是に便宜を與へられるものでないことが知れる。是に由つて之を觀れば實に寄宿舎は學生、學校に缺くべからざるものである。

純粹なる學生々活を營み、眞に學生時代を有意義に費さうと望む諸君よ、來れ！舉つて！幸に我校にこの設備があることだから。

○修養と快樂、

搖籃の中でねん／＼したり、赤い饅頭を貰つて泣き止んだり、蝶よ花よと愛で育てられた坊ちやん達、小學校の課程も漸く終へて町の中學校に入學すると同時に寄宿舎に入れられる。どちら向いても知つた人とは一人もない。入學の日父兄に送られて、初めて見も知らぬ寄宿舎に身を置かれ次第に遠ざかつて行く父兄の後姿を見送りつゝ、情然と立つてゐる時、眞紅の太陽將に西山に没しやうとして淡い光を斜に坊ちやんの顔に注ぎ、思はず宿す涙はルビーの様に光りて、薔薇色の頬を傳つて落ちる時、故郷戀し、父母懷しの想ひは少々なハートに來往し、今にも呼び返さうとする時のあはれさ、楠公父子の生別にも勝るかと思はれる。漆み入る様な夕々の鐘の音に夜の暮は全く閉され、自習の机に向ふ際、床に入る際、ねぐらを見失つた子鳥の様に、今宵初めその獨り寝に又新

しく涙を催し床を濕ほす。抑々これが父母の思の海よりも深く、山よりも高いことを感する第一歩で寄宿舎生以外に到底求むることの出來ない修養の最初である。斯くして我儘の一つだも許さぬ規則正しい寄宿舎に其の日々を重ねる中、自然に慣れて朝夕の物寂しさも薄らいで来る。上級生同級生には禮節を以て交はり、生來の短所は段々撲滅され、新しく他人の長所を取つて茲に健全な思想になる。一方運動は各自の身体に適當な様に自由にする様の設備が出來てゐる。故に學校での勉強と相俟つて追々理想に近い學生となることが出来るのである。

我舎の最も誇ることは共同一致の精神の養成と禮儀正しいことである。樂しみも苦しみも喜びも悲しみも、共に等しく相分ち、或目的に向つては自己を犠牲に供しても協力一致し、大いに盡すのである「親しき中にも禮儀あり」との語は舍生の情態を最も適切に言表はしたものである。交はす言葉は穩かに、道は相譲つて謙遜を尊び、自尊は抑壓して他人を敬する等は舍生のモットー

で、日々の行動に明かに表はれて來るのである。以上の事實は將來社會に立つた、その効果の大なることをたしかに證される事であらう。

嗚呼！感謝すべき寄宿舎生活の賜よ！ 吾々は

前述の様な恩恵を享有するばかりでなく、尙ほ他に到底筆舌に盡し得ない清い快樂を得ることが出来るではないか。舍生相互は互に兄弟の様に相敬愛し、舍監の先生方を親の様に慕つて、和氣雰々のその日／＼を暮すことは、恰度故郷の父母の膝下に居る様な心持になるのである。又一週に一回位行はれるコムバニーは、室長初め室内の一同樂しく誇笑し打興じて夜の更けるのも知らない位である。その樂しさは如何に輕妙な筆も言葉も決して盡すことは出來まい。一學期間に一度か二度開催される寄宿舎茶話會は、各室のコムバニーを擴大した様なもので、舍監舍生一同團欒して大いに談話や餘興に花を咲かすのである。

學校の修學旅行の外に、土曜から日曜にかけての寄宿舎の旅行がある。その樂しいことは言ふまでもないことであらう。春は爛漫と咲き亂れた櫻

の下や、小鳥歌ふ野原に、秋は千人の紅そむる山に又暮狩りに、一年中の樂しさを到底枚舉することは出來ない。暑中休暇や冬やすみ、さては試験休みにバスケットを提げて故郷に歸省するその嬉しさは又格別である。

斯様にして學校で大いに勉強する傍、不斷の修養と無限の快樂とを得て、やがて卒業せんとする時には、將來社會に出て大いに活動し、千歳青史に名を留める様な偉人となる素要を贏ち得て、立派に學校を去ることが出来るのである。

或る夕べ

五河牧てき

木槿の白い花が黃昏近い夏の日光に輝いてゐる時、其の根元の散り亂れた花の上に、一疋の青大将、何物かをねらつて居るかの如く、鎌首を擡げて、じつと前方を睨めて居ました。其時は暑中休暇の或夕べ、暑苦しい室を逃れて庭に下り立つた時、私が眼にした一つの出來事でありました。

夕日は青大將の鱗の一枚一枚に寂しい光を投げてゐました。それから約一分間の後には、一匹の蛙を口にして惜らしい程落ちついてゐる青大將、

逃れやうとして満身の生命力を出してもがきつゝ滅入る様な悲鳴を擧げてゐる蛙の姿が、瞬きもないで見守つてゐる私の眼に映りました。今や蛙のからだは刻一刻と恐い蛇の中へ吸ひ込まれて行きます。噫！弱い者の懸命の努力も遂に無駄であります。ギューッと極く微かな、然しはつきりとした最後の一聲を、次第に濁つて行くたそがれの空氣の中に遺して、蛙の姿は全く無くなつてしまひました。

「あの最後の叫び！ 生に對する執着！ あゝ、まだ生き度いのだ!!!

私はふら／＼するからだを漸く支へて、グツと足を踏みしめました。そして空を仰ぐと無數の星が、やる瀬ない想ひに少さい胸を痛めてゐる私のに淋しい滲い光を投げてゐました。

では北の庭先の向ふの離れに居ましたがうすら寒くなつてきたのでこの室を占領したのです。

この室もそりや静かです、かへつて淋しいほど……。桃色の壁には「ミレーの晩鐘」とユーポーの肖像がかかつてゐます。それが如何にもこの室の氣分を靜的に、莊嚴にしてくれます。のんびりした田園との氣分とのコントラストが面白いぢやありませんか。晩鐘と言へばこの家から一町ほど西の方に寺院があります。そして釣鐘が丁度本堂の横の高い鐘樓にクッキリ黒々見えてゐます。白い髪の年よりの寺男がいつも夕方になると種木を打ち振ります。ト－い、ひゞきです。

私はいつも目をとちてその音をききます。暗いくらい地、底へ下もしむ込む様なその響を……そして私の魂までが永遠の中に滅入つてしまふ様な寂しさに引づられて行きます。壁にかゝつてゐる晩鐘の様な莊嚴をつらぬく幸と祝福の歎びはありません。私には寂寥のシンボルとしか聞かれないのであります。私の性格の弱さから來るのでしやう。もうやがてウンターです。だいぶ長く田園にゐ

田園から

五雨 毡上 露翠

日が照つてゐます。コスモスの花びらが一つ散りました。残つた花がかすかにふるへてゐます。やわらかい小春日和の日ざしが木の葉のおちつくした枝の間から班点の様にスタデーの様をでらしてゐます。しばらくでもポンヤリしてゐるご寂しさが水の様に漲つてきます。働いてゐるのもほんの僅かですけど……。私——少くとも現在の私は……犬をつれていや犬に引かれて野道を走るのが何よりも愉快な事の一つなんです。だがそれも自發的でなければならないと言ふ前提が必要です。斯らしろ」と命ぜられることに私には大きは反撥と、侮蔑心が湧きかへるのです。そうした日は一自不快です。

今ステディにころんでゐます。この部屋は南の方の畑に面した小さつぱりした所です。この間ま

ます。このスプリングからです。丁度一ヶ月はござ——。私のこの單調な生活のもかなり變化のありました様に、あなたの生活にも異常な變化と美しい魂の生育があつたこと、思ひます。あらゆるもののがすべて變動の渦巻でした。度々TやHへ行つてしかられてから百日の餘にもなつたんですもの……。父も年を取りました。いつも眼鏡をかけて新聞なんかをよんでゐます。二人ともいゝ人になりました。然し今の新しい言葉で言つたら「いゝ人」は或は許されないでしやら、要するに穩健な信心深い人であると言つたら別るでしやう。マザーはまた田舎者で昔めいた人なので少々勤突もやります。しかし情にあつい女性です。今になつては私一人を二人して的にしてゐるのでです。極度の田園生話の嫌惡から田舎を去らうと思ふ日がないでもありませんが、然し年老ひた恩人をすてゝその命に依らずして走るところが罪惡のやうに怖ろしくてなりません。それでこの頃は浅い浅い頭の中から詩や歌の眞似をして自ら田園詩人らしくやつてゐます。ほんとうにかうした考へにでも

ならんけりや仕方がないんですよ。

ある時はこんな事もあつたんです。それは臘月夜のある夜でした。バケットに好きな本を少しと着物をおしこんでフアームを去ろうとしたんですけど、煙の中を徘徊してゐました。なぜなればこれがこれが最後だと思つたんです。すると寂寥を破つて父の咳聲かしました。私は佇みました。私はかつて味つたことない懐かしい聲でした。十八年と言ふ長い間心から育んでくれた恩愛が今更の様に自分のさもし心ににじみ出たんです。涙が止めどもなく流れました。私はそつと木蔭をくぐつて自分の室にかへりました。衣を被つた様な月光が淡く流れ遠くから笛の音がきこねてゐました。

私はそれっきりかうした無謀な返逆は企てません。ごん底にはまだそうした執着の殘滓があるかも知れませんけど……。少くとも表面は温順な「ファーマー」に成ります。ファーマー——さうです。然しどう言ふ意味でのファーマーなんだか自分でも別りません。まあ眞を聞ない

瞑想的、孤寂的であると言ふ事は許されるでしやう。實際私は淋しい男です。ユーゴーの肖像が毎日私の心に何物かを私語して呉れます。

吉聞と惣兵衛が和の現在の生活を痛々しく嘗めます
ミミズを扱ふ——百姓——それはもう私にはたへ
られません。それが善かれ惡かれ百姓である以上
一面ドン百姓たる事はのがれられません。それは
あまりに淋しすぎます。淋しさを通り越した嫌悪
にさそはれる。しかし私は祈ります「忍べよ強か
れ」と。

こゝ暫く私にウンと考へさせて下さい。やがて
は新しい生活が私の上に表れるでしやうから。そ
れまでは所謂馬鹿になつてゐませう。

秋がだんだん深くなつて行きます。絹をふるはす様な白楊の葉摺れが夕焼の空鳴り渡ります。いろんな花が潤んでゐます。木の實がこぼれてゐます。青白い瓜の様な月がト——あゝあれ現れてきます。死に近づいた虫がそれも知らずに鳴いてひとしほの静寂におどして行きます。本を読むにもあまりに淋しい。私のこゝろ——。では失禮しま

す。で下さい。兎に角鋤をとる詩人めいたルーラルボエットを想像して下さい。勿論K、TOKUTO M Iさんの様な美しいしつかりしたライフを稱しえべきじやありません。凡てが殆んど機械的にやつてゐます。こゝまで書いたら私の生活もほどお解りになるでしやう。苦しくてたまりません。生徒と言ふ固い假面を被つてまで自分に叛かなければやならん自分の現在なんです。自分を虐げねばならないほど苦痛が他にあるでしやうか。

田園生活——かうした言葉があなたの心にどんなひゞきをあたへるでしやう。そこは色彩に満ちてあるでしやう。廣い野原には怪物の様な木々が並んでゐます。時に急く鳥が羽を打ち交して飛んでゐます。美しい彩りを貫いて寂寥と言ふ感じに閉されてしまひます。破れかゝつた垣根にさりまたれた黒ずんだ家の内で、獨り夕べの祈りをやる時なんかは魂が死んだ様な寂しさに引づられて行きます。かうした中に居ると淋しさに沁々と人間の跡を考へさせられます。どこを見廻しても淋しさだらけです。こうした環境に支配されて居る私に

海の大日本帝國

(一九二一、一〇、八、三)

西洋の海國は英吉利である。東洋の海國は日本である。

卷之三

る。蓋世の英雄ナポレオンも英吉利を征服する事を得ず。蒙古の艦艦も我國には散々の目に會つた

のである。是皆海の賜ではないか。海は英國のそれの如くまた日本帝國の生命である。唯だ爰に僕の殘念で堪らないのは、外國地理の時間に先生が教室に圖を掛けられる時、英領の桃色が六大洲のそちこちを美しく彩つて居るに引換へて、赤い色は唯だ東洋の一隅に小さく染め出されてあることである。僕はこの地圖に面する毎に、何時も僕等海國男子は此上大いに海上で活動せねばならぬ、日の丸の旗おし立てゝ逆捲く怒濤と戰はねばならぬと云ふ念がむら〳〵と胸に湧いて來る。果しな

い大海原を家として貿易に又無盡藏の富の採集に從事しておらるゝ海國男子の勇壯な働き振りを偲ぶのである。

海の大日本帝國に生を得た幸福な我々は成人の曉は此の狭い土地に醒起して居らず奮つて海外に出て至る所に新日本を建て、海の日本ではなくして日本帝國の海を作らねばならぬ。噫!!其の時こそ地圖は赤い色で美くしく彩られるのである。

愛と誇りの完成が人間生活

の根本義

四乙 谷澤仁郎

愛と誇りの完成が人間生活の根本義ではあるまいか?人云ふものは愛せずには生存しない本質を持つて居ると思ふ。今母たる禽獸が子たる禽獸に對する心現片實を見るならば、必ず其の愛と云ふものの我等に對する何物なるかがわかるだらう。又愛と云ふものがなくして生存しない、本質を持つて居ると同時に人は恥を憤り誇りに勇む

本質を持つて居る。文明社會に於ける無教育者の中にも、また現代に於ける蠻族の内にも侮辱屈辱の自覺は、しばしば身命をもなげうつ憤勇心となつて發現する事實を見てもわかるであらう。即ち愛は生活の一極で誇りは其の他極である愛は生活の遠心的傾向にして誇りは其の求心的傾向である人が進歩するにも一足は前方へけり他足は後方へける。愛と誇りの兩極傾向は一人の全的主張である。

愛も誇りも主觀的實在であると同時に客觀的心理である。而し創造が愛の完成の爲めにも誇りの完成の爲めにも必要である。故に世界の功績を表徵する文明は愛と云ふの成長である。社會は協力である社會の大小は協力の大小である。十九世紀以來社會が著大な力を以て大きくなつて來たことはその事みづからが愛の伸暢である。愛と云ふもの一要件は他人否他生物の志を助け遂げるにある。凡そ生物の志は創造によつて最も十分に達せられる。創造力の最高度に賦與されて居る生物即ち人類が個人個人の爲めにも一團否種族即ち族的

夏の夕

三乙 細田宗次

鳴蜩暫し黄昏を告げて、日は沈みぬ。

晚鶲の一羽「カアー」と一聲、静かなる夕暗を破りて、古寺の森を指して飛び去りし後は、只寂として人語なく、物音なく、燈彭なく、恍として清淨真如の界に入るが如し。

あゝ静かなる夏の夕、ふと一陣の涼風に送られて「ゴーシ」と告ぐる入相の鐘……低く長く、而して哀れを催す此の響。撞き出すは、そも何人なるか、明日をも知らぬ老僧か、はた此の浮世を捨てし尼僧いや、げにうら悲しき感にうたる。やがて人家に灯の影見にそめて、いつこよりか蚊遣の煙、いとほのかに流れ來ぬ。

時

三乙 野瀬光三

にもその志を最も大きく伸べつゝあるは不思議でない。爭鬭力よりも發明力が種族保存の條件である理由も此の原則的一面である。現代の人類を愛する一方法は分配の改整である事は明白だが、生産の増大は一層根本的な一方法である。けれども生産は創造の別呼である或は其の一稱である。

次に誇りと云ふものは孤獨を捨てて社會に進み小社會を振り捨てて大社會に進むところに誇りの一要件は満たされる。社會は其の成員の頭數に於いては複であるが、意義に於いては單である。各人が自己の仲達のかたちに於いて他の各人の仲達に多少貢献しまた各人が他の各人に奉仕するかたちに於いて多少身己の仲達に寄與する事實がこれこそがこれのみが、社會である。社會は愛の檜舞台である。其れと同時に誇りの檜舞台である。天國を愛する心は、隣人否他人を愛する心に發達すべきである。學生の間否中學生の間にも然り。即ち愛或は誇りは一團体の完成に於いても歸一する最後の意義に於いて誇りは愛の完成者である。誇りは愛の代表する。誇りが生活の主徳である(完)

て、さながら鏡の面にむがひたらんやうなれど、一たび溢るれば澎湃として山を崩し、岩を裂き、堤を決り、家屋を漂はせ、人畜を殺傷す。

又かの風を見よ。おだやかなる時はこぼるゝ露の音さへ聞はず。梢にさはぐ響もたぬ、さながら世は太古にかへりたらんやうなれど、一たび怒れば驟然として雲を捲き雨を飛ばし、砂を揚げ石を走らし、萬木を摧殘す。

あはれ、この世のにかくばかりつよきものあらんや。されどこれを時の力に比べれば如何に。

若かりし人をも忽に老ひしめ、強かりし國をも忽にして滅ぼし、肥沃なりし田畠をも砂礫の原と變じ、廣かりし河をも狭くし、深かりし海をも淺く、歌舞の聲かまびすしかりし巷をもあはれはかなく、燕雀のすみかをとあればてしむ。そは實に何物ぞや。

移

水か風か否、否、皆時の力には非らずや。あはれ強き力よ。恐しき力よ。さるにても此の力、時の力のまにく變りゆく世界こそめはれなれ。もうひ行く人こそまことにあはれなれ。

古來日本帝國には學者が多く出た。然し益軒先生程優れた學者はなからう。

先生の姓は貝原、名は篤信、字は子誠、通稱は久兵衛益軒又は損軒と號せられた。筑前福岡の人であつて、その前即ち祖父の代まで備中の人であつた。父の名は利貞號は寛齋と云て、黒田侯に仕へ藩の醫官であつた。兄さんが三人居られて長は家時、仲は元端、末は義質と云はれて、長兄はごの様な人か世に余り知られてなく仲兄叔兄は存齋樂軒と號として、二人ともみやこに出て學ばれ、存齋は藩の世子の師傳となり樂軒は相續せられた

先生は父君の官舍で寛永七年十一月四日に誕生

我が身その人數にもれぬこそここにあはれなれ鳴呼。時よ！時よ！なごて水の如くは弱からざる。

風の如くは弱からざる。あゝ強き時の力よ。

益軒先生を懷ふ

一甲 石島達

さて先生に四十有余年學職に在り、三世の君に仕へられた、元錄十三年七十才の時奉仕を止められた。然しながら國君からは月俸を給ふて老後を優遇せられた。致仕の後は先生専ら著述に力を用ひ鎮思錄のやうなのは止德四年稿を終られ同年秋八月二十七日に卒せられた。遂に一世の大學者はゆかれた。その辭世に、

平生心曲有誰知 常畏天威欲勿欺
存順沒寧雖不克 朝聞夕死豈不悲。

幼求斯道在孤懷 德業無成夙志乘
八十五年爲曷事 讀書獨學是生涯。

來しかたは一夜ばかりの心地して
やそちあまりのゆめをみしかな。

噫嘻大學者は八十五の長命を以て遂にゆかれたらし遺業は年のふる毎にその光を増さう。

又先生は詩歌を作るを好まれなかつた。即ち「
詩は我が國の風俗にそむけり。國土によろしから
す、こころことば同じからざる故にかよひ難く知
りがたし云々」と言はれた。

蚊遣たく夜

一丙楠好雄

乳房

一丙松宮誠一

五燭の電燈の下に机をすゑて、私は勉強をやり出した。今夜はなぜかむしもつた。その上うるさい程蚊が来て、御免とも素麵とも云はずに刺す。晝の中にかけなかつた作文をやつと半分書いた。ホツと一息ついて又書き出した。ブーン。かゆい。思すひたひをたゝいた途端、作文の清書の上に血の一滴……私は今つぶした蚊がおとしたのだと思つた。せつかく書いた作文は駄目になつた。時計が十時を報じた。

電燈はくらい。むしあつ。蚊は刺す。やうやう書いた作文は駄目になる。寝むたい。私は腹が立つたが、仕方がない。私は立つて蚊遣線香を出して火鉢の中に立てた、こすじの青い煙がゆらゆらと立ち登つた。

二本の線香が中ば灰になつた頃、蚊の鳴く聲も低くなり、初夏の夜は大分ふけた。

嬰兒の母を慕ひ、能くなつくは乳房あるが爲なり。

如何に餘念なく玩具を弄び居る時と雖も、如何に泣き居れる時と雖も、一度母が乳房を出すを見れば、忽ち匍ひ來りて喜嬉こんを飲む。又他念あるなし、

己れ幼かりし時又唯一の物として愛せしあの乳房、今は干葡萄の其れの如くなりて、折折是をなぶりし話さる、いとなつかし。

新年の遊戯

一丙土屋庄造

「神様三が出る様に」と弟が拜む眞似してふつたさいころは、見事に六と出た。一度に笑聲がおこつた。



弟は「神様は意地悪だなあ！もう神様なんか拜んでやらんぞ」。「それ私が」。兄さんはさいをさし上げた。ボトリ「どれ三だ」「うそ六だ」。兄「三減るこさあゝゝ」。兄さんは、くやしさうに賞品の密柑をちらりと見て、さいを僕に渡した。「南無三三を」と目をつぶつて、さいを落した。二二が出了た。間も無く勝負がついた。

さて、「誰が一番に上つた」とお父様が問はれる。弟は元氣よく「私が一番です」と懷中から澤山の密柑を出して大ニコヽ「やはり神様は悪いなあ」と僕はいつた。「僕は四つ」と云ひながらチラリと兄様の方を見ると、兄様は懷中を山の如くにふくらせて、黙つて笑つて居た。「一番負けたの誰？」と言ふ母の聲に初めて氣がついて見る。すみの方で妹が今にも夕立しさうな顔をしてひかへて居る。同は思はずと笑つた。妹は待つてましとばかりに泣き出した。

僕は餘り可哀さうになつて來たので、大切な蜜だが二つやつた。



紀 行

第五年秋季修學旅行記（東京長野方面）

記録係 安食鳳麟
夏川貞藏 中山重雄

十月三日

彦根—國府津

午後六時半彦根驛集合、一行五十名、午後六時五十七分汽笛一聲、懷かしき故郷彦根の地をあとにして向ふ一週間の修學旅行の途に上つた。暑さの漸く去つた秋の空は曇り勝ちで、出發間際になつてボソリ／＼と雨が降り出して、我等の旅行を見舞つた。無くもがなと思つても致方がない。何と云つても精進の良い方々の御出馬となると違つた物だ。天に在す神様迄も平素教室に苦しむ我等の旅行にばと膽を抜かれさせ玉ふたものと見ねますわい。

一同乗客の次第に減り行く夜行列車に席を取り

御得意の妙技を盡す。音頭が始まる。歌となる。詩吟に變る、琵琶歌も出る。あらゆる十八番が互ひに演せられる。吾等一同は此等のロハの妙技にチヤームされて、時間と空間との變化を知らない。車内には吾等一行の他には乗客もないのに、あたりかます大はしやぎ、大小幾つかのステーションを、時々寒さうな而も寝む相な驛夫の呼聲に過ぎるのをさとるのみ。中京も何時の間にかすぎて濱名湖、天龍大井の諸川も通り越した。此の頃は流石の一行も、當日の角力大會先程の喧騒の疲弊に征服せられて、外套、マントにくるまつてうとうとやり出した。それも僅か半時許り、富士見ゆ見ゆの聲に淡き夢を破られ、何處よ富士はと窓外を見れば、未だあけざる丑満時の薄墨の中に怪物は頭を黒雲に包んで横はつて居るではないか。之があきれててゐる。兎角たる中夜はほの／＼と明け果てゝ、楽しい修學旅行も第二日となつた。

十月四日 國府津—箱根

午前五時二十分、汽車は豫定より後れて静々と

國府津驛に入つた、小田原行きに乗替へ、約十分にして小田原に達す。此處より電車にて湯本に向ふ。電車と云つても名こそ良いが粗末な／＼而も福知山中學生の一團と同乗なので、車内はギチギチ痒い所も搔けない有様、甚だ以て困却仕つた。六時十二分湯本着一同は漸く蘇生した思で飛び降りる。此處から先は登山電車で、脚を病む連中は之に乗り他の一同は徒步にて四圍の風光を愛でつゝ山を登る。

箱根は實に偉大なる天然の大公園である。自然の絶景に人工の設備を加へて以て遊覽に便ならしめて居る。歩を止めて岩角に踞し、仰げば崔嵬たる群山昂然として高く天に冲し、俯して之を瞰下すれば千仞の幽谷前に横はり、後に控へ、神斧鬼刀を以て劈割截断した様な中に、幽かに溪流の渓々たるを聞くのみ。景は歩一步上るに従ひて益々雄大に、愈々幽邃に、大文豪大詩人を以てするも。皆筆を擲つて此の大觀の前には平伏せざるを得ないのであらう。塔澤、太平台官下等幾かの温泉村を過ぎて、先づ宿に着く、所は是神奈川縣足

柄下郡溫泉村字底倉鳥屋旅館。一行宿泊の所地。

湯本から電車で來た連中は、早や宿に着いて湯に入り著物を着換へ、胡坐をかいて澄まして御座る。途中雨に出遭つた連中は、指を嘲へながら美ましげに之を眺めつゝ荷を宿に置き、尙も此の元氣で箱根全山を征服せんものと大分鼻息が荒い。案内筆一名を唐び一行三十五名宿を出づ。數町にして強羅に到る。途中絶勝は猶も盡きずして白鷺瀧○○瀧△△瀧寺數多を見る。金五錢を張込んで強羅遊園に入る。併し我等は雨に苦しめられて人工の巧は天然のあの偉觀には及ばないと捨科白して此處を素通りにして急坂な山を登る。案内者の曰く「あれが小地獄、あれが早雲嶽あれが明神岳あれが明星岳あれが何あれが何ど。此處よりは石田山も見られれば、昔の有名な東海道箱根八里の邊も望まれる。段々登るに隨て、硫黃の臭が嫌に鼻を衝く。愈々目的の大湧谷（一名大地獄）に來たのだ、多數の硫氣孔からは蒸々たる物凄い音を立てゝ水蒸氣硫化水素無水亞硫酸等の混合氣体し恰度卵子の黄味の腐つた様な惡臭を放つて幾丈も

／＼も彼方此方を垂直に吹きあげて居る。凹地にはグラ／＼煮に上つた溶液がある。足下は次第に熱くなつて來た。實に地獄とは好くつけたものだ。今にも爆發したら？と我等の運命を測るものある。水蒸氣で一町先も見ぬない程である。運を天に任せて生心地なく早く此の土を逃れんと焦る。漸く峰に近く茶屋に着く。此の様な山奥の茶屋にしては設備のよく行きどりして居るのは、客の多いのを証明して居る。熱い茶を啜り暫時憩ふ。亭主生玉子を籠に入れ、前のグラ／＼煮ねたつ溶液の中に入れる。見るまにゆでられてある。此の様な奇觀は平地では見られない。我等は漸く蘇生の思ひして茶屋を出で、山を登りつくし、我知らず快哉を絶叫す。下るべき湖尻方面を見渡せば、我が琵琶湖の子の様な可愛らしい小さな湖が、湛へられた水を重さうにして我等一同を待顔の体である。湖尻迄一走りに走り下る。湖尻で暫時休憩三艇に分乗して先程茶屋で遭つた故國滋賀師範生の後を逐うた。湖面清澄鏡の如く、山高く直ちに水に迫り、松影倒に水に映り何とも形容の出來な

かれし所を示す。是なむ往時其の威を振ひ、今も猶天下に歌はるゝ箱根關所存在せし所なる。吾人此處に到りては實に感慨無量云ふに堪ふべからざるものがあつて暫し去る能はざらしめた。併し時間少く、あまさへ萬斛の降雨の爲に茲を辞し、垣々たる大道を蛇行式に登る。登り盡してまた下りとなる。下つても下つても道は果てぬ。隨分まあ登つたものだと今更ながら驚がざるを得ない。少しも知らぬ道を間道ばかりに取つて走に走る一同の了簡の横着さ。漸くの事で宿に歸つた。ようく歸れたものだ。時に午后四時、直ちに湯に入り陶然として今日の勞を醫す。夜は故郷に在す父母兄弟親友等それ／＼へ今日の愉快さを具に報告に及ぶ。床に入れれば昨夜の不眠の爲め直ちに駒々然十月十五日 箱根—東京

静かな湯の宿の一夜は明けた。二階から見渡すと彼方の神山の胴腹に美しい白雲の徂律してゐる氣持の好い朝である、

安ノ下から湯本まで電車は早川の溪を右の窓から見せ左の窓から見せて山を下る。

いよい眺てある。先程から泣面をして居た空は、急に益を覆して製來して來た。約一里半の長い問船中に立ん坊、城にあはれなりけりである。案内者遙か彼方を指して、あれが河村端賢の開いた水門である。之が何、あれが何と一々説明する。雨は猶も降り續く。一同は始めの程は自然の絶景と船夫の清き船歌とに恍惚として居たが、豪雨の御見舞でそれ所でない。一刻も早く陸に上りたい物だぞ、船足ももどかしそて足摺す。漸くにして壯麗美絶なる離宮の前を通り、本箱根に着いた。一行船より飛び上つて、近くの家の軒に雨を避く。先着した師範生は附近の艇庫に後生大事とやつて居る、雨稍々小降りとなる。師範生と相前後して舊東海道を辿りて歸路に就く。名にし負ふ函谷關にも比すべき函關ありし地なれど、數園の老杉兩側に併立して晝尚暗く、大刀腰に足駄がけにて征服した古武士の傍惚ぶに足る。あゝ彼等去つて數百歳、時移り世は變れども、依然として存する大樹老杉語らすと雖も亦舊時を語るに似たり。「舊箱根關所趾」と古びたる石碑に書かれて一段高く築

湯本で乗換へ、小田原で乗換へ、藤澤で下車。見るご東京の専賣局の工女らしい大團体が来る江ノ島行の電車は當分乗れ相もない。若い娘もお婆さんも勇しく唱歌を歌ふ。しまひには早稻田の校歌まで飛び出したのには些か驚いた。

江ノ島まで一里半の道を歩く。ゆるやかな傾斜の山があり、青い菜の畑があり、薄の花がいつぱい咲いてゐる道を歩いて、江ノ島へやつて來た。「名物にうまいものなし。」から「名所と好い所なし。」といふおかしな定理を勝手につくつてゐた私達にとつて、江ノ島は思つたより好い所である。

少くとも寫真で見るよりは好い。

この日、海はすこし波があつたがぼんやりしたうす曇りで、江ノ島ははるか彼方に茫と浮いて見ねる。

あの長い橋を渡つて解散、時ははや十二時頃、時間は一時間程しかない。

神社に參詣して大急ぎで窟を見に行く。道の兩側にはすらと茶屋が並んでゐる。そしてそれには全部若い娘さんや中年のお婆さんが立つてゐる。

「おはいり遊ばしておみやげ御覽遊ばせ。」

「名物の壺焼あがつていらつしやい。」

遊ばせづくめに妙に尻上りのいらつしやいにの
しぶとい狹撃で眼をふさぎたくなつた。そして雅
兒ヶ淵まで出た時にはほつとした。

岩屋へは大枚五錢を奉納してはいぬ。入口まで
來てゐる海水が非常に美しい。岩の色も赤味がか
つた紫で非常に美しい色である。

眞暗な中へはいつたがつまらない。中は岩に鍼
力がかぶせてあつて水がぼごく落ちてゐた。

腹は空つたが時間はなし、一時はデレンヤと陥
つたが、兎に角どうにかなつて片瀬から電車で長
谷へ。

名に負ふ七里ヶ濱、その静かな病院、ゆるや
かな傾斜を持つ小山の間の牧場、それ等は何どな
く南國伊太利の田舎を思はせた。

秋の風はのかに吹けば相模なる七里ヶ濱

今日は「無白き富士の嶺」は見なかつた。

長谷大佛や觀音堂を拜する。大佛の中へはいつ
の水夫さへ泣く。

勇

うつゝてゐるものなつかしく思はれた。

東京横濱間は京濱電車と、省線電車と、汽車と
三複線ともいふべきもので、みな競争で大急行、
東京の市内をひた走りに走つて、ふざ目にいた
有樂座を見てゐる内に汽車は東京驛のプラットホ
ームにすうと止まつた。

須田町裏の宿に落付いてから、みんな東京の第
一夜は享樂の巷へと奔る。

神田では本屋の東京、淺草ではオペラの東京、

銀座ではライオンやバウリスターの東京。

青い灯、赤い灯、黃な灯の夜の東京はまだく
宵であるものを。

十月六日 東京

今日はうれしい花のお江戸見物。七時に宿を出
た。どうも天氣が悪い。必配しながら行くと電
車にのる頃、とうとく降つてきた。それでもうれ
しい、今日はお江戸見物だもの。先づ日比谷公園
へ一同公園前に揃つて中を見物した。その整然た
るものさすが帝都一の公園だ。それから貴族院へ
規模の壯麗に驚きながら守衛について議場に入る

てみると中に本体がある。眞理の内に眞理ありと
いふ様な事を文字通り偶像化したわけ。

鎌倉へ着く。雪の下の段葛を通つて八幡宮に至
る。その境内は松達に清々しい感を起させた。

兩側に松の大樹のある廣い道を行くと、石段の
横に例の銀杏の樹が聳ひて、その色と朱塗の門の
色あせた朱とがうまく調和して落付いた感を起さ
せる。傍の鳩に豆をやつてゐる幼女も可愛ゆく、
實におだやかな景色。

水色の鎌倉山の秋風に銀杏散りしく石の
きざはし

尤も銀杏の散るのには早かつた。

その他賴朝の墓や鎌倉宮を見て、汽車の都合で
先生方の定められた時間よりは一時間早くなつて
お蔭で汽車におくれて森下先生の御厄介になつた
者もあつた。筆者もその一人であつた事をそつと
つけ加へておきます。

今朝からの豫定が狂つたために、横濱は寄れな
い事になつた。滝車の窓から見た横濱は、流石に
港の情調が漂つて、折柄どもつた青い灯が堀割に

頗る丁寧な説明、議場の様子など略分つた。それ
から隣の衆議員の方も見學した。そこでも頗る丁
寧な説明があり、有名な代議士の席なども分つた
見學終つて外へ出るごとに雨はいよいよはげしう降つ
てゐる。「うらめしい雨。樂しい旅行も雨に呪はれ
て」そこはしながら櫻田門へ向つた。道々外務省
や司法省などの高壯な建物を見ながら櫻田門へや
つて來た。さすが井伊大老の事なども思ひながら
自然に襟を正して、そこ通つた。それから二重橋
の前へ來た。蕭々と降る雨の中に、大内山は九重の
奥深く摸索として聳ひて居る。一種言ひしれぬ尊
嚴さにうたれて、一同橋のたもとに整列して恭し
く遙拜した。それからまた櫻田門にひきかへして
それから井伊伯爵邸へ行く。邸は麹町區にあつて
こゝから十二三町もあるが、一同徒步でお堀のぐ
るりをまはつて行つた。雨はすこし小降りになつ
たが道の悪いのに閉口した。井伊家の門前に立つ
たのはちやうど十一時。一同奥へ通されて茶菓の
御饗應にあづかる。森下先生一行を代表して御挨
拶あり、井伊家家令の御挨拶があつた。伯爵は御

病氣のため御轉地御療養中で御留守であつた。それから帝大史科編纂官文學士中村勝磨氏の「井伊家勤王事跡について」の御講演を拜聴し、直弼公幼少の御時の書物など拜觀した、それから一同晝食を御馳走になつた。一時井伊家を辭して、それから一同自由行動に移つた。まづ近くの靖國神社に參拜する。高く聳ねて居る大村益次郎の銅像に敬意を表し、拜殿に詣る。國家のために命をすてられし幾多の英靈に額づいて、しばらく默念した

それから遊就館へ入る。無數の陳列品はもうたゞ目を驚かすばかりである。そこを出て芝の増上寺に行き、徳川歴代の廟殿を拜した、本殿は修繕中であつた。それから公園も素通りにして泉岳寺へ四十七士の墓に詣つた。さすが線香の煙も絶じない、恭しく禮拜してそれから寶物など拜觀した。それから電車で三越へ。赤毛布ぶりを出さないやうに頑張つたが、うつかりエスカレーターに喜んでどうぐ露見した。四時宿へ歸つた。夕食終つて級長の「十一時まで外出許可」のうれしい傳へにまた宿を飛びだした。大東京の眞中の萬世橋の

橋の上で電車にのれずに、まごついてまた赤毛布の失敗をくりかへす。やうやうぶらさがつて上野公園へ來た。そして静かな不忍池のほどりの夜景を味つた。水の面にうつるイルミネーションは田舎者を喜ばすのに十分である。それからまた電車にぶらさがつて、淺草見物、さすが東京一の盛り場だ。もう觀樂に酔つてしまつて、やうやう十一時宿へ歸つて來た。

十月七日 東京—長野

午前記録。六時朝食。後直ちに砲兵工廠に向ふ。一同其の規模の宏大なるに膽を奮はる。殆んど總てが電氣仕掛ければ、煤煙天を蔽ふ光景は見られないが、カン／＼ギイ／＼バタ／＼耳も聾せんばかり。まるで一の工業市でも見る様である。各工場參觀の後、後樂園を素通りす。此間約二時間、飯田町より省線に乗東、明治神宮に急ぐ。新宿にて下車。直ちに神苑に入る。古木鬱蒼仰いで天を見ざるが如さ古風なしと雖も而も域地廣大社殿壯嚴自ら吾人をして襟を正さしめた。一同拜殿前に整列し、かけまくも畏き永へに民安かれと祈り

給ひし御仁慈深き大帝を昔を遙かに偲びて、暫し無言の祈を捧げ奉つた。稍ありて踵を返して日本の大鳥居をくぐつて、徒步乃木邸を訪問小さい家屋の周圍を棧橋も廻り渡るべくなされてゐる是こそ忠勇無雙我國民模範たる軍神乃木將軍の日夜住まはせられた所である。實に質素極つた物である、現し世を神去りましく大君のみあと慕ひとあへなくなり給ひし將軍の當時を追憶すれば、すぐる熱き涙の済を覺えた。午後五時歸館の條件附で一同解散、時に午後一時。各自自由の行動を取り

軽ては去らむとする憮れの花の都を彷徨す。雨天にて道悪しき爲、さなきだに込む電車を愈々満員ならしめて、乗るに乘られず、止むに止まれず、吾人の進退實に谷まる。或新聞紙曰く、「帝都の眞中に新親知らず子知らずを現出す」と至言といふべきである。修繕中の道路を雨充分こなして丁度鳥鶴の土を歩いて居るかの様、

午後五時夕食。七時再會を約して約二時間外出銘々故里に我等の安否を氣遣ふ彌近への家苞をあさる。七時集合。上野驛に急ぐ。

數多の卒業生諸兄は復々吾等一行を見送り給ふ午後八時××分發の列車に身を投す。乗客の大部分は北國人らしく、言話等も大分異つて居る。汽笛一聲汽車は動き始めた。不夜城の花の都をあとにして、我が汽車は暗黒世界に入らむとしてあるのである。おゝあこがれの華の都よ、東洋第一の帝都よ、いざさらば——一行は將に懷かしき故郷に歸る第一步に就かんとして、過ぎにし二日は連想してある一種云ふべからざる感に打たれて居る。

汽車は暗黒の中に夕立の空よりも猶廣い武藏野の原を北へ／＼とひたもの走つて居る。暗黒の中流石都の空のみは幽かに明るくして、吾等に名残を惜むかの様

午後十一時と云ふ真夜中に、汽車は日本一の险處確永峰に指しかゝつた。汽罐車は電氣仕掛けの前後二輪にしてギシャゴン／＼と歩一步登つて行くのである我等の普通の歩いて居るよりも猶のろい。止るのは未だおろかあさしざりする様な場合も二度や三度ではない。大小無數のトンネルを過

さて、列車は輕井澤○○、××、△△等と過ぎて平坦なる信濃の平野を疾駆し八日午前三時無事一行を長野驛に下した。

十月八日 長野—松本市外

東京の秋の夜半にわかれ來ぬ仁丹の灯よ

さらばさらばと

勇

うつくしき夜のいろこそ忘られねあゝ東

京よすこやかにあれ

勇

昨夜つきの思ひを東京に残して上野驛を發つた私達は、今朝の未明に寒い長野驛のプラリットに立つてゐた。

間もなく夜が明け様といけ頃、善光寺へ出掛けた。私達は連日の疲れで「若い者にはつまらない所といふ先入主觀とで引する足も重い。

併し夜も明けて鐘がなり、善男善女の群夥しく「尼宮さま」がお詣りになる頃は、流石佛都だなと思はせる。

鉢々のなかにただおみ旅びとのわれもを

ろがむ秋の大寺

牧水

それから「階段めぐり」で「幸福の鍵」をちや

秋は來にけり

牧水

信濃の連山はだん／＼紫色が濃くなつて、曠野のボブラ樹に除ろに夜の魔者のせまる次、静かな山の湯の宿になつかしい灯のつき始める頃、私達はこの町にはいつた。

最後の夜をゆつくり湯にはいつて落付く。

食 先生方にも來ていたぞいて僕が旅行中の感想を忌憚なく言ふ。

終つて氣がつくと、外は静かな雨が降り出して人なつかしき夜である。

山の雨しは軒の椎の樹にふりきてなが

き夜の灯かな

牧水

十月九日 松本市外—彦根

五時半起床。昨夜夜通し噴水の音に氣をでもんで、噴水の音だとばかり思つて居たら、ほんとに雨が降つて居る。

うらめしさうに雨の松本市をにらみながら宿を出發した。それから松本城見學、平地に五層の天守閣が立つて居るのだ。戰國時代には小笠原侯が

つかせて寺内を一廻りする。

後の山へ上ると善光寺平は一望の内、川中島の朝露、ありし昔を偲ふべく、千曲川の流れはこのほどりに閑居して藝術に精進した島崎藤村を思ひ起させる。

みんなもぎたての美しい林檎を買つて山を下る

三時間も待つて十二時に松本へ向ふ。

松本の近くの姥捨山のあたりは好い所である。

松本から淺間まで一里と聞いてうんざりする。

自働車があるが「おたつし」がきびしくてそれも徒らに私達の足を重らせるだけとなるばかり。

血のしたゝる肉は眼前にぶらさがるもの餓いたる犬の途に食ふべくもない。思ひ切つて歩く

併し松本市外から淺間までの道はなつかしかつた。少くとも歩いただけの價値はあつた。

北海道を思はす様な廣い／＼高原に、一筋の白い大道が續いて茶店の一軒家がばつんと立つてゐる夕暮である。

秋風は木の間に渡るひとしき桔梗色してやがて暮るゝ雲

近世には戸田氏の城となつて居たものだ。

「たてまはす高嶺は雪の銀屏飛、中に墨繪の松本の里。一同天守に登つたが、松本市は眼下に見ゆるが、銀屏風の日本アルプスが今日の雨天で見れないのが遺憾だ。この松本市は人口四万もあつて養蠶業が盛である。それから葡萄、紫の露のしたたるやうな一籠を、誰も土産に忘れるものは無かつた。九時三十一分松本發。あたりに葡萄畑が多い汽車は鹽尻からいよ／＼木曾の山中にかかる、第一驛は洗馬、木曾の門戸であつて、木曾義仲が出陣の時馬を洗つたところだと傳へて居る。汽車は奈良井川に沿つて走る。眺望はいよ／＼よくなつてくる。しばらくすると、きれいな瀧が目の前にかかるつてゐるの見ゆる、これは壽山の瀧と云ふ。ださうな、車中の老人指して鳥居峠だと云ふ。見れば模糊として前に横はつて居る「ひばりより上にやすらふ峠かな」は即ちこれである。汽車はその下をつきとほつて行く。藪原を過ぎる

といよ／＼木曾川が右手に見ゆて來た。あたりは山岳重疊して樹木鬱鬱、その間を木曾の大渓谷は

雨岸窄迫、迂餘曲折、激湯急流をなし、岩を噛み雪に噴いて、實に絶景である。汽車は早や木曾福嶋に着いた。こゝは木曾第一の繁華地である。東西兩京の中央に當り、江戸へ六十八里、京へ六千七里と云つて居た。昔は番所を設け「旅人をしらべた所だ、福島を後に木曾川を右に見て進むと木曾の機道が見ゆる。それもトンネルへ入る時ほんのしばらくあつと思ふまに汽車は暗の中を走つて居る。これからいよいよ佳境に入つて来る。上松驛あたりは兩岸相迫つて、怪岩竝立して屏風岩、鳥帽子岩、獅子岩など名がある汽車がまさにトンネルに入らうとする時、あの寢覺の床の絶景がながめられる。奇巖相疊んで兩岸清流に迫るところ實に天下の絶景である。「あつ」!感嘆聞もたらす間もなく、汽車はざんく走り去つて行く、滑川の鐵橋を通ると、小野の瀧と云ふのが左に見ゆる。それがあり汽車から近いので、あつと思ふまに見ゆなくなつてしまふ。須原、三留町とすぎて汽車は中津川へ行く。中津川は濃尾平野と木曾谷の交通の要路に當るところだ。汽車は平凡な山谷の

間を走つて行く。しばらくするごと、土岐津川に添つて走り出す。こゝでもまた土岐津深谷の勝が眺められる。この邊はトンネル、トンネルと出たご思ふごとまた入るごと云ふ調子で、無數トンネルがある。燒物の名産地多治見をすぎると、もう尾張平野が目前に擴がつてくる。勝川千種などを経ていよいよ汽車は名古屋驛についた。一時間ほど汽車の時間があるが、もう町も見物する間もない。六時三十分また名古屋を出發、車中一ねむりで、汽車は九時過ぎ懐かしい彦根の驛にとまつた。伊藤先生と山本先生が迎へにきて下さつて居た。一同驛前で萬歳を唱へて分れた。



詩壇

特別會員

清堂 川島丈内

彦根治春八首

○櫻樹○豪籠絳霞
○危謹似促登臨興
○一川如練碧迢々
○畫舫樟來重柳下
○晝○夜○一○亭○人○不○散
○菅公廟畔月曠朧
○柳邊誰放木蘭舟
○半夜一碧磨來鏡在外
○春風儘送竹枝歌
○拾翠城東野興多

○隱約歌聲水上浮
○絲聲肉韻亂春風
○春酣芹水第三橋
○黛螺如夢認笙洲
○春風儘送竹枝歌

○隔能湖飄然午出館
○樣與人連帶冷麥熟
○風帶山遠寒滿田疇
○席茅而箕跔柔遠氣
○相半獨嬉游

○日暮初歸館
○垂綸自悠々
○小流入湖春過花落後
○倒影黛色幽缺處望眼濶
○一路人不遇陣々吹芦葦
○家臨水處一帘青

○春過花落後
○已而到湖頭
○布驛直如坐
○萬頃煙波浮
○荻蘆綠漸長
○乃有呂望簪
○擅勝湖畔路
○聊得消客愁

南窓春暖雨餘天
獨坐朝來無一事

燕子尉々亭子前
落花深處枕書眠

謹奉送

三丙 膽岳 角田清

龍船鶴鵠久西巡
紅旭無無迎御輿
天漢不盡德無比
想見皇儲還啓後

到處君王握手親
瑞雲萬萬結交隣
禮教能寬識絕倫
日東文化一番新

和歌

特別會員 佐竹貞一

冬の歌

成業歸來古帝鄉
九重車駕鳳龍色
禁苑丹楓裁綺錦
秋深億兆共欣杯
群臣賜瓊筵
白鳳城南帝子臺
青山自嘆鸞旌過
萬國衣冠侍嘉宴
誰能應令咏魚藻
奉迎還啓有感

謳歌載路五雲揚
千里旗旌日月光
仙屋黃菊帶清霜
瞻仰威光中外張
五雲深處近蓬萊
碧水遠繁玉殿來
群臣劍佩曉行杯
當有唐朝沈宋才

南天のいろめる房の辛して
ゆきうけて燒む紅の色哉。
腹這うて古き繪詞くる床の
手のいと凍るまだ小夜ながら。
いさゝ言いうて炬燧に足を入れ
世の中は憂きや樂しきしかすがに
寝居れは吹雪戸毎にひゞく。
悟れはなきをわすれかねつも。
命のまゝ命も縁も名も愛も
湧き出でゝ潤れて又 る

○死の歌

灰色の静けき湖面に見入りついざり火の見ゆる
に涙ながしぬ
静けくも凄き湖面に見ゆる漁火なつかしき光よい
ざさらば行かん
すこき暗き海の彼方にあくがれのくにはあるべし
いざさらば行かん

○敦賀にて

燈台のまたゝくを見てゐる膝許に小さき猫のはひ
よる草原

パン買ひて橋を通れば天の川空を二つに分ちて流
る
パン買ひて歸る途中の宵暗に露西亞おとめと眼見
合せり

笙の川ひた／＼どゆるゝ小ボートに露西亞少女の
姿を見たり
眼あほき露西亞少女の住む家の前にゆらりと立て
るひまはり
狂ひたる女の所業を見て笑みし面差けなるまな少
女かな

棕梠の花

五乙 中山重雄

○梅雨

川をへだてみめ美きひとの手すさびの琴の音聞ゆ
くたびれ耳に
試験終へて歸る汽車よりふと見れば小さき墓地に
月見草立てり
梅雨晴の／＼と立つ夏雲に月見草の花はしほ
れて咲けり

○ぎばしゆ

起きぬけに堀抜井戸に水掬ふわが牛冷たしむらさ
きぎばしゆ
堀抜の井戸の水音に眼醒めたるわが眼にうつるむ
らさきぎばしゆ

○若狭
なつかしき若狭の海を思ひ出でぬ「岩屋」の老爺今
もおはすや

渡り鳥

五乙中山

○新秋

静けさや横の通りの行人の足のあひまにこほろぎ
のなく
伊吹山雨のあがりし夕空に聳ねて高しこほろぎの
なく
いかにせんいらだしさをいかにせんものおもへ
とやこほろぎなくに
たゞひとり夜の波止場にわれ立ちてむかひの山の
松蟲をきく

あづまぢより信濃路へ

五乙樋上露翠

まだ知らぬくにを慕ひてあくがれの旅に出づらん
むれ渡り鳥
あくがれの方をぞ戀ひて飛びやまぬこゝろ悲しき
むれ渡り鳥
いつの日までこがれゆく身を渡り鳥いつの日命の
終るも知らず

○異国情調

とづくにの波止場にたゞすみもの思ふ猶太女の唇
のあかさよ
とづくにの港の瓦斯のまたゝきにマンドラをひく
猶太の女
きみ知るや南の國の灯の光りその灯のもとのさみ
しき女
居留地の窓にひちつくおごめ子をふと仰ぎ見し時
のさみしさ
世界人獨逸の國の居留地をうすわらひして通りけ
るかも
三色旗びらりとまつはる居留地にうすき日のさす
人稀にして

○すゝき

銀いろのすゝきの花は時雨れたる近江のうみにい
まさかりなり

常夏をねがひし身はなほ秋雨のしぐるゝ原のすゝ
きはかなし

されわれ秋の夕に咲く花のすゝきを見れば悲しきものを

日毎日毎しぐれ雨降るすゝき野の花のつばみに秋
たけにけり

○初冬

くつきりと冬空にたつ杉木立牧場の小家の壁の白
さよ

牧場の松の木立の合間より七尾の小の雪白く見ゆ

○渡り鳥

うつろなる冬のみ空のかぎりなく頭上にひろがり
て渡り鳥なく

渡り鳥遍路のならず鐘のごと聲ふるはしてさすら
ひゆくも

よ渡り鳥

潮鳴に五百重の涯もわれゆかんともにぞゆかんや

五乙樋上露翠

ちくま川いざよう浪の岸近く淺間も見ゆす歌ぞかなしき

さすらひのたそがれ悲し野の鐘は君います空にひ
ゞくかと思ふ

信濃路や吹くかせさむく秋のきてみ寺の塔に夕日
かゞやく
おひ笈のおもきになやむ峰路や足につめたき夕し
ぐれかな
たびなれぬわれは眠れず起き出でゝ眼に涙しの湯
のまちの灯に
今日もまた湯まちの雨にふるさとへたよりなご書
き一と日送りぬ

鐘の音はこほくうすれて湯のまちの岩葉すゞしき
夕ぐれのあめ。
かへり行く舟子がうたのやゝきにて静かにくるゝ
夕なぎの海
雨のかり妙にこぼれしさくら貝花とやさかん雲ま